

M251214 (第一)

「おめでとう、恵まれた方」

ルカⅠ：26－38

○導入

みなさん、おはようございます。今日からアドベント3週目に入りました。いよいよ来週はクリスマス礼拝ですね。私たちは、私たちのためにイエス様がこの地に来てくださったことへの喜びが増し加わるアドベントの日々を過ごしています。また、本当に早いもので今年ももうすぐ終わり、新たな1年を迎えるとしています。なので今日はマリアの受胎告知の箇所から、共に「恵み」について考え、私たちに与えられた恵みを数え、その中でも一番大きな恵みであるイエス・キリストを再確認していきたいと思います。

では、本日の聖書箇所をお読みします。新約聖書ルカの福音書Ⅰ：26－38のみことばです。お読みします。ルカの福音書Ⅰ：26－38

○「恵まれた方」という言葉の意味

今日の説教題は「おめでとう、恵まれた方」です。この言葉は、28節にあるように、受胎告知のために遣わされた御使いガブリエルが、マリアに最初に語りかけた言葉です。

「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

しかしマリアは、このあいさつを聞いて喜ぶよりも、ひどく戸惑いました。「これはいったい、何のあいさつのだろうか」と29節に書かれています。マリアにとってこの出来事は、祝福としてすぐに理解できるものではなく、まったく予期していなかった、理解不能な出来事だったのです。

聖書を見ていると、神様に召され、神様と出会った人々には共通点があるように思います。それは、「その日に神様に出会うことを、ほとんど知らなかった」という点です。

皆さんはどうでしょうか。神様に回心した日、イエス様を人格的に救い主として知った日、その日が来ることを、前もって知っていたでしょうか。多くの場合、私たちは予想外のタイミングで、予想外の形で神様と出会います。

ここで、28節の「恵まれた方」という言葉に注目したいと思います。この言葉は、原文では完了形で書かれています。つまり、「過去に起こり、今も続いている状態」を表す言葉です。

さらに、この言葉は受動態です。マリアが何かを成し遂げた結果として恵みを得たのではありません。自分の意思や努力とは関係なく、神様の主権によって、すでに恵みを受け取っている状態に置かれている、という意味です。

30節でガブリエルは、「あなたは神から恵みを受けたのです」と言います。マリアが気づいていようと、いまいと、すでに神の恵みの中に置かれている。それが神様の宣言でした。

私たちも同じです。クリスチャンとは、「自分の功績や能力によってではなく、受けるに値しないのに、神様から一方的に恵みを受けた者」と言い換えることができます。

また、この「おめでとう、恵まれた方」という言葉の脚注を見ると、「喜びなさい」と訳すことができることが分かります。韓国語の聖書では、この箇所は実際に「喜びなさい」が加わっています。これは当時よく用いられたあいさつの言葉でもありました。

世の中の喜びは、多くの場合、「何かを成し遂げた時」「願いがかなった時」「得をした時」に生まれます。しかし、聖書が私たちに教える喜びは違います。私たちが喜ぶ理由は、「主が私たちに恵みを与えてくださったから」です。

そして、その恵みの中心が、御使いも「主があなたとともにおられます」なんだと言っています。これこそが、私たちに与えられた最大の恵みではないでしょうか。

○戸惑いと恐れの中で

29節には、ガブリエルの登場とあいさつに、マリアがひどく戸惑った姿が描かれています。これは人として、ごく自然な反応だと思います。

ナザレという田舎町で暮らす、12歳ほどだったのではと言われていますが、その少女の前に、突然御使いが現れ、「おめでとう」と言う。その上、「あなたは身ごもって子を産む」と告げているんです。

問題は一つでした。マリアは、その時、妊娠してはいけない状況にあったということです。文化的にも、律法的にも、そして個人的にも、これはスキャンダルであり、命の危険すら伴う出来事でした。

私たちは思ってしまいます。「どうして神様は、ヨセフと一緒に時に御使いを遣わさなかったのか」「町全体に現れて説明してくれればよかったのに」と。

でも神様は、一人の人に現れ、一人の人に語られます。1対1の関わりを大切にされるんです。マリアも、突然スキャンダルの中心に置かれました。イエス様が姦淫の女を守られた場面がありますが、この時、マリアを弁護してくれるイエス様は、まだ生まれていません。

ヨセフもまた恐れました。マタイ1章には、彼がマリアをさらし者にせず、内密に去らせようと決めたことが記されています。マリアはこの時、いろんなことが頭によぎり、多くの恐れを抱えたと思うんです。

○疑いと質問は不信仰か

そして、マリアは34節で御使いに尋ねます。「どうして、そのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」

この言葉は、反抗でも拒絶でもありません。むしろ、神様を信じたいからこそその問い合わせです。疑心と不信は違います。不信とは、最初から神様を否定し、心を閉ざしてしまうことです。しかし疑心とは、信じたいのに理解できない、その葛藤の中で生まれる問い合わせです。

聖書に登場する多くの人物たちは、この「問い合わせ」を神様に向きました。アブラハムも、モーセも、ダビデも、そして詩篇の作者たちも、「なぜですか」「いつまでですか」と神様に問い合わせ続けています。そして、神様は、その問い合わせを答める方ではなく、むしろ聞いてくださる方でもあるのです。

私たちの信仰生活の中でも同じことが起ります。信じたいのに信じきれない出来事、理解できない試練、祈っても答えが見えない時があります。すべてを簡単に説明できる信仰は、実はとても表面的なものかもしれません。本当の信仰は、分からなさを抱えながらも、神様の前に立ち続けることです。

神様に質問することは不信仰ではありません。むしろ、「分かったつもりになること」「神様の御心を先回りして決めつけてしまうこと」こそが、私たちを神様から遠ざける危険があります。マリアは、自分の恐れや混乱を隠さず、そのまま神様の前に差し出しました。ここに、神様との人格的な交わりがあります。

○マリアに与えられた三つの恵み

御使いの説明を聞いた後、マリアは38節でこう告白します。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、おことばどおり、この身になりますように。」

この短い言葉の中に、マリアに与えられた三つの大きな恵みを見ることができます。

① 神様に選ばれる恵み

一つ目は、神様に選ばれる恵みです。バプテスマのヨハネの両親であるザカリヤとエリサベツについては、1章6節で「二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた」と紹介されています。信仰的にも、人格的にも、立派な人たちでした。

しかし、マリアについてはどうでしょうか。彼女について書かれているのは、「ナザレの町の一人の処女」「ヨセフのいいなすけ」という情報だけです。特別な信仰の功績や、靈的な実績は何も記されていません。

神様の選びは、このように不思議です。マリアが救い主の母になりたいと願い、祈り続けていたから選ばれたわけでもありません。むしろ、何も準備していない、何者でもない一人の少女が選ばされました。

私たちも同じです。神様が私たちを選ばれる理由を、私たちは完全には理解できません。しかし、理由が分からなくても、選びが確かであることだけは変わりません。これもまた、恵みです。

② 信仰が与えられる恵み

二つ目は、信仰が与えられる恵みです。マリアは、すべてを理解したから従ったのではありません。「おことばどおり、この身になりますように」と告白した時点でも、先の人生がどうなるかは分かりませんでした。それでも、神様の言葉を信じる力が彼女に与えられたのです。

ルカ1章45節で、エリサベツはマリアにこう言います。「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、なんと幸いなことでしょう。」

また、アウグスティヌスも、この箇所について、「マリアは肉体的にイエス・キリストを宿す前に、信仰によってその心を神の御子に開いた」と語りました。

私たちがイエス様を主と告白できるのも、私たち自身の力ではありません。**Iコリント12章3節**にこうあります。聖霊によってこそ、私たちは「イエスは主である」と告白することができるのです。信仰そのものが、神様から与えられる恵みなんです。

③ 従順へと導かれる恵み

そして3つ目は、従順へと導かれる恵みです。38節のマリアの告白は、人生全体を神様にゆだねる告白です。「私は主のはしためです」という言葉には、自分が誰のものであるのかを知っている所属意識があります。そして「おことばどおり、この身になりますように」という言葉には、神様の言葉に従って生きるマリアの決意が表れています。

しかし、この従順は、決して安全で楽な道ではありませんでした。婚約中の妊娠による誤解、周囲からの視線、ヨセフの葛藤、出産後のエジプト逃避行、そして後には、十字架に向かうイエス様を見守る母としての苦しみが待っていました。

それでもマリアは、主に自分をささげ続けました。**ローマ12章1節**ではこう進められています。そのように、私たちもまた、どのような状況にあっても、自分自身を神様に喜ばれる生きたささげものとして献げるようこのアドベントにも招かれているのではないでしょうか。そして、その従順を可能にする力もまた、恵みとして神様が与えてくださいます。

○まとめ 一 恵まれた方として生きる

「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

この言葉は、二千年前のマリアだけに向けられた言葉ではありません。イエス・キリストによって救われた私たち一人ひとりにも、同じように語りかけられている言葉です。

私たちの人生には、理解できない出来事や、喜ぶよりも戸惑ってしまうような現実がこれからもたくさん起こります。不安や恐れ、疑いが心を占めることもあります。しかし、そのただ中で、神様は「主があなたとともにおられる」と宣言してくださいます。

アドベントの時、私たちは待ち望みましょう。状況がすぐに変わらなくとも、答えが見えなくても、神様が共におられるという恵みは、すでに私たちに与えられています。

理解できないからこそ神様に尋ね、恐れがあるからこそ神様に近づき、弱さがあるからこそ神様の恵みにすがる。そのような歩みの中で、私たちは「恵まれた方」として生きる者へとさらに整えられていきます。

このアドベントの時、私たち一人ひとりが、与えられている恵みに目を向け、「主がともにおられる」という喜びの中を歩むことができますように。

祈ります。ルカⅠ：28